

## 1. 推進地域の現状と課題及び調査研究の目的

琉球列島の言語文化は、我が国の言語文化において独自の価値を有し、その豊かさを掘り起こす研究が脈々と積み重ねられてきた。しかしながら今日、琉球諸方言はユネスコの消滅危機言語に認定され、地域に根ざした伝統的な言語文化の継承と創造的発展のための教材・カリキュラム開発が喫緊の課題となっている。しかしながら、学校現場では「どう取り組めばよいか分からない」、「国語学力向上にどう結び付くのか分からない」などの声があり、一部の教師によってのみ実践されているという現状がある。本研究はこうした現状と課題を踏まえ、宮古・八重山地域をフィールドとし、地域の伝統的な言語文化に深い親しみをもたせ、かつ国語学力形成との関連を明らかにする単元モデルの開発と実践を行い、実践事例集を作成することを目的とする。実践事例集作成を通して、地域の伝統的な言語文化を教材とする実践の広がりや深まりをもたらす、カリキュラムに位置付ける際の拠り所としたい。

単元モデル開発については、以下の5つを観点として取り組む。

- ①伝統的な言語文化の豊かさを内化し、他者に発信できる児童生徒の育成をめざし、グローバル化社会に求められる自他の文化を尊重する態度を育む。
- ②地域の伝統的な言語文化を足場にして古典や他地域の言語文化を学び、グローバル化時代に必要とされるメタ言語（文化）意識育成を図る。
- ③身近な教材や地域人材の活用を通して言語活動の充実に図り、児童生徒の学習意欲・探究する姿勢、自己学習力を伸ばす。
- ④国語学力の基盤を形成する内言の領域（思考力、想像力、感受性、情緒等）を耕す。
- ⑤伝統文化の継承と創造的発展への参加を通して自らの言語生活を豊かにする言語文化生活者を育てる。

国語教科書と連動させて取り組むことができ、言語活動の充実に資する単元開発に努め、学校現場で活用しやすいように工夫する。

## 2. 調査研究の実施内容

### (1) 具体的な実施内容 類型【 I 】

各地域で現場教員と研究者による研究会をもち、以下の手順で進めた。本事業は、平成 29 年に告示された学習指導要領（小・中学校国語科）における【知識及び技能】(3)「我が国の言語文化に関する事項」「伝統的な言語文化」の学習として基本的に位置付けた。国語教科書とも連動させて単元を開発し、検証授業を行い、それに基づき実践事例集を作成している。以下のように実施した。

#### 平成 29 年度

8～9月、宮古・八重山地域において「伝統的な言語文化」学習に熱心に取り組む教員とつながり、優れた先行実践の発掘に努めた。

11～12月 八重山の拠点校（小学校）における教科書教材と地域の伝承とを関連付けたモデル単元の開発及び検証授業・授業研究会に取り組んだ。今後も活用できるように、地域の伝承をもとに創作民話教材を開発した。授業研究会は、近隣の小学校教諭も含め、25名程度の参加があった。

- 1月 宮古の拠点校（中学校）において、地域語継承に携わるゲストティーチャーを招き、自他の言葉を尊重し、比較言語意識を育成するモデル単元の開発及び検証授業・授業研究会に取り組んだ。授業研究会には地域の方も多く参加し、50名程度の参加となった。
- 2月 八重山にて小中の教員が集い、「伝統的な言語文化」に関する実践交流会を行った。八重山の中学校教員による地域の歌謡「とうばら一ま」創作に関わる実践事例発表及び小学校における地域の季節感を表現する俳句づくりの実践事例発表を行い、それに関する質疑応答を行った。参加者は、11名と少人数であったが、若い教員の素朴な疑問（どう自分自身が地域の季節感を感じ、どう地域の伝統的な言語文化に親しむか）や言語活動の充実のためにどのような手立てが大切かなどについて熱心な議論を行った。

#### 平成30年度

- 7月 2月に行った研究会を踏まえ、八重山の小学校で歳時記づくりの検証授業及び授業研究会に取り組んだ。また宮古の中学校で、地域の伝統となっている俳句を鑑賞し、解説する単元の開発及び検証授業・授業研究会を行った。
- 8月 「伝統的な言語文化」をテーマとする単元学習を実践されている講師をお招きし、宮古の中学校における実践事例発表とともに、「伝統的な言語文化」学習に関する研究会を行った。宮古・八重山の教員、琉球大学の附属校教諭や学生など50名を超える参加があった。講師による講話と助言を頂き、足元にある伝統的な言語文化を教材とすることによって、伝統を受け継ぐ言語文化生活者として学習者が育つ単元学習の在り方と意義について共有した。
- 9～1月 実践事例集作成に向け、これまでに検証授業を行った実践事例について実践記録を執筆していただき、何度かやりとりして修正した。
- 2月 印刷し、完成。その後、県内の小中学校に配付する。

## （2）成果の検証

何よりの成果は、今まで地域の伝統的な言語文化の学習に情熱をもって個別的に取り組んでこられた方々がつながりあい、実践交流する場が生まれたこと、同時に今まで関心をもてなかった若い先生方が先輩の先生に学び、その情熱と実践を受け継ぐ場が生まれたことである。「自分と同じ思いで、地域に根ざして地道に実践に取り組む人がいるということが分かってとても心強く思った」「小中とつなげて実践していく道筋がつかめた」「構えず、日常的に取り組むヒントを得た」「自分の実践事例を参考に、広がってほしい」「身近な地域の言語文化を教材とすることで、親しみだけではなく、主体的に伝えようとする姿が見られ、豊かな表現が生まれた」など、授業者や授業研究会の参加者からの振り返りが寄せられた。

以下に、成果物の目次を紹介する。実践者による実践事例とともに、研究者による専門的な立場からの解説及び今後取り組む時のヒントを書いた【コラム】を掲載したところに特色がある。「おわりに」では、「伝統的な言語文化」の学びが育む国語学力モデルを提示する。

## 実践事例集 「伝統的な言語文化」の学びの創造～宮古・八重山編

はじめに

### [宮古編]

単元「自分のすまふつ事典を作ろう

～みゃーくふつ（宮古語）を味わい、感じたことを記そう」（中学1年）

…謝敷勝美

【コラム】「みゃーくふつの「美しさ」の表現」

…中本謙

単元「先輩の俳句を鑑賞し、その良さを伝えるリーフレットを作成しよう」（中学2年）

…飯島大貴・武藤清吾

【コラム】「宮古における俳句創作の伝統」

…武藤清吾

### [八重山編]

単元「『スーホの白い馬』と『シバンと赤馬』をくらべ読みしよう」（小学2年）

…安谷屋寿々・宮良永秀・辻雄二・望月道浩・村上呂里

（テキスト）創作民話「シバンと赤馬」

【コラム】「動物と人間が紡ぎだす絆の物語

～『スーホの白い馬』と『赤馬節』をめぐって」

…辻雄二

単元「八重山の歳時記づくり」（小学6年）

…仲本英男

【コラム】「歳時記づくりのために

～南琉球の季節を表す言葉」

…中本謙

単元「ことば博士になって、『ことばの道』を想像しよう

～「月ぬかいしゃ」～」（小学6年）

…村上呂里・神山綾香

単元「『とうばら一ま』作詞に挑戦！

～歌い継がれている作品の良さを見つけよう～」（中学2年）…佐渡山圭吾

【コラム】 宮古・八重山における「伝統的な言語文化」学習を支える

読書環境づくり・ブックリスト

…望月道浩

おわりに 「伝統的な言語文化」の学びが育む言葉の力

…村上呂里

例えば、「『とうばら一ま』作詞に挑戦！歌い継がれている作品の良さを見つけよう」の学習では、地域のとうばら一ま大会で歌い、地域の方々から温かい激励の言葉を受けるなど、伝統文化の継承と創造的発展に参加し、言語生活を豊かにする言語文化生活者として育つ姿が見られた。また、ゲストティーチャーによって地域ごとに微妙に異なる言葉を体感したり、モンゴル民話と地域の伝承との共通点を見出したり、自他の文化を尊重する姿勢とともに比較する意識（メタ言語（文化）意識）が育まれている姿が見られた。地域の俳句創作の伝統を背景とする先輩の俳句を鑑賞し、解説するリーフレットづくりでは、

自校の文化を受け継ぐ主体として他者に伝えようとする意欲的な姿勢が見られた。歳時記づくりでは、地域の言葉が育んだ見方・考え方に気付き、ハッとする様子や、五感をくぐって感じとった季節感を最もびったり表現する言葉は何か、言葉を懸命に選ばうとする姿が見られた。

中学2年のときに『とうばら一ま』作詞に挑戦！歌い継がれている作品の良さを見つけよう」を学習した生徒の中学3年時における全国学力・学習状況調査（平成30年実施）においては、生徒質問紙（22）番「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」において、「当てはまる：13.1%（全国10.7%）」「どちらかといえば当てはまる：28.8%（全国28.1%）」という結果となり、いずれも全国平均を上回っている。また国語Bの大問3の三（領域：伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（1）ア（イ）古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。）における正答率は、53.5%（全国49.6%）という結果となり、全国平均を上回った。今後、更に実践を積み重ね、経年分析が課題となるだろう。

2年間という限られた期間での萌芽的な研究であるため、実践事例が少なく系統化するには至らなかった。とりわけ宮古における小学校の単元開発に取り組めなかったこと、また平成29年学習指導要領で提示された、小学校低学年における言葉遊びに親しむ単元を開発できなかったことは残念であった。今後も継続的に取り組み、実践事例を積み重ね、系統化していきたい。

### 3. 実施体制

教科専門と教科教育学及び読書教育研究者と現場教員との協働により取り組む。

（教科専門）

琉球語に関する基礎的知見に基づく教材開発（中本 謙）

地域の言語文化に関する基礎的知見に基づく教材開発（辻 雄二）

（教科教育学）

国語科教育の専門性に根ざした教材開発と単元デザイン（村上 呂里（小）・武藤清吾（中））

（読書教育）

読書環境デザイン（望月 道浩）

（現場教員）

謝敷勝美（宮古市立中学校教諭） 飯島 大貴（宮古市立中学校教諭）

仲本英男（石垣市立小学校教諭） 佐渡山圭吾（石垣市立中学校教諭）

### 4. 今後に向けて

作成した実践事例集を研修（国語科の研修・しまくとうば普及の研修など）等で活用し、さらなる実践の広がりや深まりを目指し、地域の伝統的な言語文化の学びを学校現場に根づかせていくことが当面の課題となるであろう。また、さらに実践事例を積み重ね、「伝統的な言語文化」学習を系統化し、カリキュラムに位置付けていくことが課題となる。

本事業における検証授業では、「伝統的な言語文化」学習における5つの観点（1. 参照）について、実際に児童生徒の学ぶ姿として確かめることができた。今後、実践事例を積み重ねて系統化することを通して、この5つの観点がどのように言葉に関わる学力として学習者に定着していくか、国語学力モデルの検証と練り上げも重要課題となるだろう。